

■ 神 奈 川 大 学 図 書 館

横浜 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 TEL (045)481-5661(代表)
平塚 〒259-1293 平塚市土屋 2 9 4 6 TEL (0463)59-4111(代表)
<http://www.kanagawa-u.ac.jp/lib/index.html>

アーカイブズと プランゲ文庫

後 藤 仁

この9月29日(月)から10月4日(土)にかけて、内閣府に設けられた研究会の一員として、アメリカとカナダの国立公文書館(National Archives)を見学してきた。ワシントン2泊、オタワ2泊のあわただしい旅であったが、いい経験をさせてもらった。アーカイブズ (archives) という言葉は、文書保管所を指して用いられるが、同時に、その保管所に収められ、永久的に保存、利用される文書類、歴史資料をも意味している。また、この分野での専門職の人を、アーキビスト (archivist) と呼ぶ。世界の各地で、アーキビストは、図書館の司書 (librarian) や博物館の学芸員 (curator) とともに、社会に対して価値ある貢献をしている専門職と認められ、若い人材を引き付けている。日本社会でも、そうなってほしいものである。

今回の旅で会ったアメリカとカナダのアーキビストたちも、自らの使命、ミッションを深く自覚した、立派なプロフェッショナルであった。自分たちの業務の顧客は、主権者にしてタクスペイヤーである市民と、市民の信託にもとづいて活動している政府機構の職員。その顧客に、公文書の保存と利用に関する高質のサービスを提供する。政府の市民に対する説明責任はまっとうされ、民主主義の実質が充実する。それに貢献するのが使命。見学の応待には、そんな気迫がこもっていた。

また、電子化、デジタル化に、積極的に立ち向っている姿勢も、私にはたいへん印象的であった。政府機構の業務内容も業務記録(records)も情報通信技術によって変容していく。業務記録のうちで、

次世代へ、後世へと引き継がれていく歴史資料も、その保管所も、当然、電子化、デジタル化の波に洗われる。業務記録と歴史資料、レコーズとアーカイブズを、1つの連続体(continuum)として概念化できなければならないのである。

さらに、公文書館と図書館の間の壁も、のりこえられつつある。カナダでは、国立公文書館と国立図書館が、名実ともに一体化し、新機関に変身しようとしている。新機関は、生の文書と刊行物を、いや多様な情報媒体に多彩な表現形態で文書化されている種々の知識資産を、記録遺産として統合的にマネジメントすることに責任をもつ。

私にとって、北米の旅は、33年ぶりであった。1969年9月から1970年8月までの1年間、当時勤務していた広告会社から派遣され、ミシガン州立大学大学院コミュニケーションスクールに留学した。

人間は、未来になにがおきるかは確定できない。しかし、未来におこりうること、おこしうることの確からしさと、望ましさに関して、事前にあたりをつけ、判断をくだせる。未来に向けて、なにをするか、なにをあきらめるか、意志を働かせ、リスクを取り、失敗も覚悟しながら、選択し、決定する。そのために、情報を求め、活用する。意志決定を支える情報システム、とりわけコンピュータ情報システムを学ぶのが、私の留学の目的であった。

往時アメリカで教えられ、今回あらためて確認できたのは、意志決定に用いた情報を文書化し、証拠性を備えた記録にしておくことの重要性である。そうした記録が公開され、多くの人に共有され、後世にも伝えられる。それではじめて、失敗だらけの人間の行いに歯止めがかかる。同じ誤りを繰り返さず、失敗を成功に転ずる可能性が強まるのである。

広告会社博報堂に10余年。次に、神奈川県庁に20余年、私は勤めてきた。情報公開法制の創設に

参画し、その他の新政策の研究開発にもたずさわ
り、最後は県立公文書館で働き、アーキビストの
仲間に入れてもらった。

この間にやり残した仕事の1つが、プランゲ文
庫に係わるものであった。第2次世界大戦後の日
本支配時に占領軍が収集した、当時の日本社会の
定期刊行物を、プランゲ博士がもちかえり、メリー
ランド大学図書館に寄贈をした。このコレクション
のマイクロフィルム化に、メリーランド州と姉
妹関係にある神奈川県として協力したかったのだ
が、うまくいかなかった。

それがなんと、マイクロフィッシュになり、い
まや、神奈川大学図書館に収められているのであ
る。2002年度研究設備整備補助を受け、大学も負
担をして購入したのだが、まことに貴重な、まさ
に記録遺産である。都道府県別の目録もついてい
る。いずれ、電子化、デジタル化も期待できる。
大学で地方自治の研究を行う機会を与えられた者
として、また、アーキビストのはしくれとして、
たいへんありがたく、ぜひ活用しなければと念じ
ているところである。

(法学部教授・自治体経営論)

会計学の世界と その研究・教育

照 屋 行 雄

私たちが生きている人生や住んでいる社会は、
あらゆる種類の意思決定の連続である。進学する
大学を決め、就職する会社を選ぶに当たって悔い
の残らない意思決定が必要とされる。また、契約
する内容を定め、投資する対象を決めるに当たっ
て間違いのない意思決定が必要とされる。特にビ
ジネスの世界では、常に適正な判断と合理的な意
思決定が求められる。今日の発達した経済社会は、
そのような経済的意思決定のための基礎となる有
用な情報を提供する合理的な仕組みと手続きの体
系を用意しなければならない。

一般に、経済活動を行う経済主体が、その経済
的意思決定を合理的に行うに当たっては、事実の
適正な処理に基づく定量的・財務的情報を基礎と
しなければならない。経済主体の中でも代表的な
企業の経営活動を合理的に遂行し、また、企業の
経営成果を適正に評価するためには、企業が行っ
た取引活動を一定の組織的な方法で記録・管理し、
その結果を貨幣金額で表示・報告する必要がある。
けだし、定量的情報は利用目的に照らして操作的
であり、また、貨幣情報は情報特性として均質
的で比較可能性が高いからである。

企業の経営活動を固有の方式で測定し、その内
容を財務情報として伝達する仕組みと役割をもつ
領域が企業会計（アカウンティング）である。企
業の経営者や管理者は、企業会計が提供する会計
情報を基礎として種々の合理的な経営意思決定を
行い、効率的な経営管理を実現することができる。
また、株主や債権者など企業と利害関係を有する
各種関係者にとっては、企業会計が伝達する財務
情報を分析・利用することによって、企業の財務
状況に関する正しい判断を形成し、投資・与信等
の意思決定を行うことができるのである。

筆者の学問的な関心は、会計学の分野の中でも
主として財務会計と呼ばれる領域にある。財務会
計は、企業の財務内容に関する有用な情報を作成
し、外部利害関係者の判断の形成と意思決定のた
めの合理的な基礎を提供する問題領域である。そ
こでは、企業の財務内容に関する「真実な報告と
は何か」が厳しく追求されることとなり、また、
そのための制度的・実践的対応が絶えず模索され
ることとなる。慣習規範としての会計原則の理論
的究明と法規範としての会計制度の体系的考察が、
日常の研究・教育活動の多くの部分を占めている。

さらに、研究の展開という面では、一方で会計
基準の国際的統合という制度的課題に取り組むと
ともに、他方でヒューマン・リソース（人的資源）
を中心とした知的資産（無形資産）の会計的認識・
測定という理論的問題に知恵を投入している。筆
者の会計学研究成果は、『企業会計の構造』、『企

業会計の論理』および『企業会計の制度』を3部作とし、その先にライフワークとしての『ヒューマン・リソース会計』の体系化が予定される設計となっている。研究の進展は牛歩の如くであるが、成果の記録は着実にページを増やしている。

ところで、会計学を学ぶものにとって、会計学との出会いや会計学研究の出発点は、技能検定試験や資格試験へのチャレンジを決意したときである場合が多いようである。筆者の学生時代もまた、後半の多くが専門的資格取得への禁欲的で長期的な戦いの明け暮れであったように思う。早い時期に学修目標を定めて、その達成のために計画的・規則的に取り組むことの意味は非常に大きいといえる。自己の人生戦略を動的に設計する過程で、内容の濃いキャリアを形成する一環として簿記技

能の修得や公認会計士等の職業会計人を目指すことは、当人の予想をはるかに超えて大きな成果をもたらすものと確信する。

会計学に限らずすべての学問に当てはまることであると思うが、ある分野や領域を研究する場合、どこまでがすでに究明され、どこからが未開拓であるかを正しく認識し、さらに、一旦定めたテーマについては、深い岩盤に突き当たるまで掘り下げるといった姿勢を堅持して取り組むことが肝要である。多くの学生諸君が、会計学への関心を持ち、会計学の理論的基礎と実践的スキルを修得して、やがて参加するリアル・ワールドでの主体的構成員もしくは指導的市民として活躍されることを期待したい。

(経営学部教授・会計学)

絶滅した古代の生物に ロマンを求めて

宇佐見 義之

私は現在、絶滅した古代の生物を研究している。絶滅した生物の筆頭と言えば恐竜であり、恐竜の復元CGを見ると興味は尽きない。一般的にも、ジュラシックパークなどの映画は大変人気がある。一方研究の方はどうかと言えば、日本でも恐竜の化石は出土するものの、これらは断片的なものなので研究はほとんどなされていない。海外に目を向けると中国やアメリカなどの大陸ではまとまった化石が出土するので、恐竜の研究はこれらの国が中心となっている。

恐竜の研究にはロマンがあるが、私は恐竜が登場するより遙か以前の生

物の研究を主に行っている。恐竜の祖先はトカゲ型の爬虫類であり、それらはずっと遡っていくといつしか魚類に辿り着くことはなんとなく御存知であろう。私たち哺乳類も、もとをたせば魚類から進化してきたので、魚類がどのように誕生したかという問題は私たちのルーツを探る旅でもある。

ところで、この魚類の祖先を探る旅は、現在、学会でもっともホットでセンセーショナルな話題なのである。これまでは、魚の祖先というとオル



カンブリア紀に出現した不思議な生物オパビニア。この時代の生物は、現在の生物の分類とはかけはなれた体の構造をしていた。このオパビニアは体長10cmくらいの小さな生物であるが、目が5つあり、現在の生物分類のどれにもあてはまらない。



研究室で再現した白亜紀の巨大な海棲爬虫類タイロサウルス・プロリガー。研究室では、理論研究をもとに、古代の生態を再現するコンピュータグラフィックスを作成している。

ドビス紀と呼ばれる、今から4億7千万年前の地層から発見される顎の無い魚(無顎類)が最古のものとして知られていた。ところが、数年前、中国雲南省の澄江(チェンジャン)と呼ばれるところで、これよりも6千万年も古いカンブリア紀中期の地層から最古の魚類(無顎類)が発見されたのである。これは発見地の名前にちなんでミロクンミンギアと名づけられた。その化石を見ると、魚には見えないが、細かい構造をみると口とエラがあり、魚類と認定されて最古の魚類とされた。従って、私たち人類の祖先は、このミロクンミンギアに似た生物であったことが古生物学の最新の研究によりわかったのである。

それでは、このミロクンミンギアと名づけられた生物はどのような生物から進化してきたのであろうか?というのが次の疑問であるが、これがよくわからないのである。地球上に初めて目に見える大きさの個体の生物が動き回るようになったのは、5億年前から6億年前のことであり、カンブリア紀あるいは先カンブリア代といわれている時代である。しかしなにしろ遠い昔の時代なので、残された生物の痕跡は非常に限られていて、これらの時代の化石はそう滅多に残っていないのである。これら僅かに残された生物の化石をつなげて

解釈していくと、生物はゆっくりと序々に進化してきたのではなく、5億7千万年前からはじまるカンブリア紀という時代に突如として飛躍的に進化したらしいことがわかってきた。なかでも多様な生物が一度に出現したカンブリア紀中期の生物群はその出土する場所にちなんで、バージェス動物群、チェンジャン動物群と呼ばれる。そして、これらカンブリア紀の生物群はそれまで空白であった地球の生態系に、突如として目に見える大きさの生物個体が出現した現象として、「カンブリア紀の爆発的進化」と呼ばれている。

私は、これら生物の進化の最も初期の段階で、生物の形がどのようなしくみで作られたか研究している。どういう風に研究を進めているか簡単に述べるのは難しいが、流体力学や力学の計算を生物の運動にあてはめて、生物の形と運動の関係を進化という観点から議論している。研究の内容は専門的で難しいが、研究から得られた結果をわかりやすく示す為に、絶滅した古代の生物の再現CGを作成した。これらは、インターネット<http://www.museum.fm>あるいはバーチャル地球史博物館(3号館; web siteに上映予定日が掲載されている)で見ることができるので、一度御覧頂きたい。

(工学部専任講師・物理学)

『家族関係を考える』

河合隼雄著 講談社現代新書 B367-162

下田節夫

この本の著者、河合隼雄氏は、今は文化庁長官をしてられるが、日本における心理療法（カウンセリング）の第一人者である。私は本学の学生相談室で学生の皆さんの相談に携わっているが、その仕事をする上で、河合氏の視点は重要な支えになっている。それを一言で言えば、ある人が心の問題を抱え、それに取り組んでいるときに、それをその人の「欠点」であるとするのではなく、その人や、そこにかかわる人々が、新しい生き方を見つけてゆくきっかけとして、さらには、同じ時代を生きている多くの人に共通のものであるとして、考えようとするのである。

この本は、「家族関係」について書かれている。人が育つ上で、家族ほど大きな影響を及ぼすものはないだろう。相談の仕事をしていると、ほとんどの場合、どんな家族の中で育ってきたのか、母親（あるいは母親代わりの人）がどのように接してくれたか（くれなかったか）、父親はどんな人だったか、などに話が及ぶ。そうした体験を振り返り、自分の中でもう一度触れなおすことを通してこそ、今の自分について、確かな感覚をつかむことができ、そこから新しい生き方が見えてくることになるからである。

この本は、その「家族関係」について、いくつかの切り口から捉えようとする。目次から拾ってみると、「個人・家・社会」「親子」「夫婦」「父と息子」「母と娘」「父と娘」「きょうだい」「家族の危機」「老人」などという章がある。そして、どの章にも、家族の問題を抱えて相談に訪れてきた人たちの具体的な例が挙げられ、それらがどのように解決されていったかが語られている。

ここで、「母と息子」という項目がないのが疑問に思われるかもしれない。これについて言えば、この本は、全篇、「母と息子」をテーマにして書かれている、と考えることができる。著者は、日本の社会・文化が、「母性原理」をベースに成り立っている、と捉える。日本人の心の底には、男性女性を問わず、「母子一体感」が流れている。われわれは、母親の、また家族の、また成人してからは所属する集団の胸に抱かれ、周囲の人たちとの「一体感」を保って生きるように育てられて

いる。そこでは、深い意味で個人と個人との関係が持たれることは少ない、と考えるのである。

ところが、ある中年夫婦の高校生の息子が不登校になった例を見てみると、母親への反抗がひどくなり、物を投げたりするようになったことをきっかけに、それまで会社の部長の仕事が忙しくてかわらずにいた父親が、子どもと対決することになった。父親が「人間はなすべきことはしなくてはならない、高校生は登校しなくてはならない」と言うと、息子は「お父さんは好きなことばかりしているではないか」と反発した。「会社では部長で威張り、つきあいと称して酒を飲み、休日はゴルフにばかり行くではないか」と。こう言われた父親はたまりかねて、「部長といっても、どれほど馬鹿げた仕事をしなくてはならないときがあるか、それは妻子にも語りたくない。だからどうしても好きなことをして活躍しているようなことばかり話すのだが、実際は違うのだ」と説明した。

そこに行われた会話は、本来ならば、夫婦の間でなされるべきものだった。「好きなことばかりしているじゃないか」というのは、母親が父親に言いたいことだった。「嫌いなことや馬鹿げたことを沢山しているのだ」というのも、夫が妻に言うべきことだった。しかし、日常でこのような対話をするのは難しい。息子の不登校という事態は、結果として両親の間に、個人と個人との対話の場を設定したことになった。そして、これを機会に、彼は登校に踏み切っていった。

これなどは、比較的簡単に解決した例であるが、不登校という、一見マイナスのことが、家族の成員の心の成長を促す意味をもっていることが、よく分かる。

著者は、深い意味での「個性」は、西洋文化をつらぬく「父性原理」によるものと考えているが、その兆しが、この例で言えば息子の心の中に、より広く言えば、心の問題を背負わされているかに見える人々の心の中に生じてきている、と受け止めようとする。そのような観点から書かれたこの本は、自らの「個性」を生きようとする人に、勇気を与えてくれるように思われる。

(外国語学部教授・学生相談室相談員)

『言語－ことばの研究序説』

エドワード・サピア著 安藤貞雄訳 岩波文庫 B081-1566-41

桜井邦朋

年の暮も迫った昨年(2019)の12月、カリフォルニア州パロアルトにあるスタンフォード大学へ私はでかけた。“太陽ニュートリノ問題”とよばれる難問に関わる研究を、この大学の仲間たちとすすめ、何らかの成果をあげたいと望んでのことであった。

この望みは果たせなかったが、このアメリカ行きに際し持って行ったエドワード・サピア(E.Sapir)著、『Language: An Introduction to the Study of Speech』の訳本を読み、勉強することができた。この原著は1921年の出版で、既に絶版であろうと予想していたのだが、幸いなことに二種類の日本語訳があり、このたび私は、岩波文庫版を持って行った。

宇宙物理学に関わった研究が目的でアメリカへ行くのに、言語学に関する本を持って行ったのはなぜかと疑問を抱く人があるかも知れないが、今の私にとり一番の関心事は、言語の起源をめぐる問題である。私たちは思考にことば(言語)を用いるし、いろいろな物事に対する理解にも、ことばの論理的な構造が基本的な役割を担っている。ことば、つまり、言語の体系を用いないでは、思考が発展しないのである。

ことば(言語)と文化とに関わって“サピア・ウォーフの仮説”(The Sapir-Whorf Hypothesis)と呼ばれるものがある。これは「我々は母語というフィルターを通して世界を認識する」(サピア)、または「ひとの思考様式は、その言語習慣によって規定される。」(安藤貞雄)というふうに表される。サピアも彼の学問上の弟子のウォーフも、インディアン諸語を含むいろいろな言語について研究した上で、先の仮説に到達したのであった。その詳細については、サピアの訳本である『言語－ことばの研究序説』(安藤貞雄訳、岩波文庫、1998年)か、『言語－ことばの研究』(泉井久之助訳、紀伊国屋、1957年)と、B. Whorfによる『Language, Thought and Reality』(MIT Press, 1956)を読んで、研究す

る必要があるが、言語の歴史は、当の言語を用いる人類の文化の史的な発展と表裏一体となって、刻まれてきたことから、この仮説を実際に検証する手段が無いという難点を持つ。しかし、乏しい私の経験に照らしても、この仮説の真実性は非常に高く、「言語と文化(世界観)は互いに影響し合い、また支え合っている」(金谷武洋)ことは確かである。

以前から勉強したいとの希望が、スタンフォード大学滞在中に叶えられた上に、大学キャンパス内の書店で、手に入らないものと諦めていた原著をみつけ、買うことができた。そうして英文であらためて読み直すことができたのは、大変な幸いであった。

私たち一人ひとりには日本という国に生まれ、日本語を母(国)語として学び、このことばを用いて、日々の会話から論理的な思考を必要とする学問にまで取り組む。私たち日本人が固有に持つ生得の文化様式は、日常使うことばの節々にも、その影響が強く現れている。外国語を学ぶときに強く意識させられるのは、この影響が、ことばの使い方にはっきりとでることである。

外国語を学ぶにあたって、サピアの著書について勉強し、ことば(言語)と文化との関係について意識的に学び、外国語を習得するように努めることが、多くの人にとって極めて大切なことと考え、この人の著書を取りあげてみた。

先にあげたウォーフの本には、三上章による日本語文法における「は」の用法に関するみごとな見解が示されており、三上はウォーフの論文からヒントを得たのではないかと考えたくほどである。日本語文法について参考までに、金谷武洋教授による『日本語に主語はいらない』(講談社メチエ、2002年)と、『日本語文法の謎を解く』(ちくま新書383、2003年)の二つをあげておこう。

(工学部教授・物理学)

なぜ日本経済は殺されたか

吉川元忠著

リチャード・A・ヴェルナー著
講談社 B332.16-1003



この本は『マネー敗戦』の著者である吉川経済学部教授と『円の支配者』の著者であるリチャード・ヴェルナー氏の対談集で、『マネー敗戦』執筆後（1998年）から現在に至るまでの政府の金融政策に対する批判の書である。バブル崩壊後の10年以上も続く平成大不況をヴェルナー氏は日銀の政策を第一の根本原因にあげているが、吉川教授はさらに大蔵当局の金融政策も同罪であるとして、日銀・大蔵当局のマネー戦略の失敗を原因にあげている。吉川教授は、アメリカの赤字を日本がアメリカ国債を買い続けることによって支えるというアメリカの金融政策に組み込まれることによって、貿易にドル体制をとる限り、日本の富は限りなくアメリカに吸い取られていく構造になってしまっているという。日本経済を復興させるには、国民経済を基本に据えるべきであると論じている。日本経済の今後を考えるうえでも参考になる本である。(K.N)

ヴェネツィア詩文繚乱 —文学者を魅了した都市—

鳥越輝昭著

三和書籍 B293.7-35



「ヴェネツィアはヨーロッパの京都なのだと思うことがある。」と著者は言っている。その長い歴史を持ったヴェネツィアを二度目に訪れたときに「深々と恋に落ちた」のだそうである。

本書は、著者がこよなく愛するヴェネツィアを、「到着」「広場」「河岸」「運河」「路地と船」「教会」「家」「カフェと食事」「別れ」のカテゴリーに分けて、ヴェネツィアが文学のなかでどのように表現されてきたかを引用を交えて紹介しながら、著者自身の解説を加えたものである。そして本文中には、著者自身による長年愛用したライカで撮影した写真がちりばめられていて、この町に対する愛情が、読む者に静かに伝わってくる。

水に囲まれた古い町、デジタルカメラではなく愛着があるライカ、好事家を自認する著者の面目躍如たる一書である。(A.Y)

オンラインデータベースの利用について

図書館ホームページをリニューアルしてから半年が経ちました。インターネットを通して、図書館サービスに関する情報や電子資料を提供する場としてリニューアル後もマイナーチェンジを行い、充実をはかっています。掲載する情報に関しては、情報端末やメディアの多様化により、急速に増加している膨大な情報の中から、信頼できる質の高い情報へアクセスできるよう細心の注意をはらって選定しています。

また、今年度からオンラインジャーナルの提供を開始し、Elsevier、OUP、CJO、Springer、Taylor & Francisを中心に、現在、412誌の所蔵雑誌のオンライン閲覧が可能となっています。電子媒体を利用した効率的な研究の手段としては是非お立ち寄りください。

◆リニューアル以降に利用を開始した主なデータベースについて

- ①Web of Science—論文の引用数やインパクトファクターの算出など、科学学術雑誌評価のためのデータベース機関として知られるISI (the Institution for Scientific Information) 社が提供するオンラインデータベースで、自然科学・社会・人文各分野のコアジャーナル約9,000誌に掲載された論文の引用情報を検索することができます。
- ②JDream—科学技術振興機構 (JST) が提供するオンラインデータベースで、国内外の科学技術に関する文献情報を検索することができます。
- ③LEX-DB—法律・経済・経営等に関するデータベース機関として知られるTKKが提供する法律情報データベースで、民事法、民事特別法、公法、社会経済法、刑事法のすべての法律分野の判例(全文)を収録しており、明治8年の大審院の判例から今日までの判例を網羅的に検索することができます。

図書館展示コーナー

[心のオアシス
～ 安らぐ時間を求めて ～]

展示期間 11月1日～2004年3月31日

【癒しブーム】が始まって、いったい何年経つのでしょうか？いまだブームが去る様子はありません。それは癒しを必要不可欠なものとしてしまっている、現代社会の影響が大きいのではないのでしょうか。今回は、【癒し・安らぎ】に関連した小説・詩集・絵本などをピックアップして、展示しました。また、風景写真も数多く取り入れ、ビジュアルな面でも楽しんでもらえるようにしました。その上、

緑に囲まれた空間の中で、リラックスしリフレッシュしてもらうため、展示中の図書を自由に閲覧できるスペースを設置しました。少しでもみなさんの【心の安らぎ】につながれば幸いです。この機会に是非、図書館で安らぎの時をお過ごし下さい。



一日図書館員 体験コースについて

8月18日から8月22日にかけて「高校生一日図書館員体験コース」を実施しました。これは、図書館業務を通じて、情報の収集や加工、労働の尊さなどを学んでもらうために昨年度から始めたもので、5日間で15名の参加がありました。内容は、カウンター業務、本の登録・装備業務、レファレンス業務が中心で、実習形式で実施しました。

なお、本年度から在校生向け一日図書館員体験コースを実施します。図書館業務を実際に体験することによって、図書館の資料を利用する参考になると思います。興味のある方は申し込んでください。既に10月、11月に2回実施しましたが、第3回目以降の募集については、図書館ホームページまたは掲示をご覧ください。

図書館の利用案内

1. 冬季長期貸出について

冬休み長期貸出は次の期間行います。

貸出期間：12月5日（金）～12月26日（金）

返却期限：2004年1月14日（水）

2. 年末年始の休館・休室について

12月27日（土）～2004年1月7日（水）

夢 現実 ゆめとうつつ

宮島詠士は書家であると同時に日本の中国語教育の草分けの人物だ。父は幕末の米沢藩で戊辰戦争を回避するために奔走し、勝海舟、大久保利通らを知己とした誠一郎である。誠一郎は立憲政治を唱え後に中国との外交交渉に参与し、上海に設立した東亜同文書院は江沢民ら現代中国の政治家たちを輩出した。詠士をして、中国に渡らせ蓮池書院で張廉卿に書を学ばせたのは父子二代の心をたて糸のように紡ぐ「興亜」「善隣」の思想だった。拉致と核問題に端を発した東アジアの緊張関係を解きほぐすためには、外交や圧力、駆引きだけに頼ってはならない。詠士の扁額『讀破万卷樓』（図書館所蔵）を前にするたびに、人の心とそれを育む教育の重さを思う。（空蟬）